# 通常の学級における発達障がい等支援事業
# 第1回地区別事業報告会（泉南地区）

平成25年7月29日10:00～12:00 （貝塚市教育研究センター）
当日参加者119人（幼稚園・こども園20　小学校68　中学校23　その他8 ）

## １．実践報告

### ＜貝塚市立 永寿小学校＞「わかる」「できる」授業づくり

一人ひとりの教育的ニーズに対応した「個別・少人数指導」は充実してきた。通常の学級における授業でもこういった経験を増やせないだろかということでスタートした。アドバイザリースタッフから、教師は「単元の導入」に力を入れがちだが、「単元の最後」に「やった感」「がんばった感」を味わえるような授業づくりを意識してはどうかと助言していただいた。
今後は、授業づくりの改善に取り組んでいく。

### ＜貝塚市立南小学校＞　学校全体で取り組む

支援教育の観点から、これまで学校をあげて環境整備について取り組んできている。
アドバイザリースタッフの方々に参観していただき、「見え方に困り感のある児童が相当数いるので、『ビジョントレーニング』に取り組んでみてはどうか」という助言をいただいた。
そこで、まず、子どもたちの見え方の実態を調査し、2学期から学校全体で、視覚認知を高めるトレーニングに取り組んでいく。

### ＜貝塚市立南幼稚園＞　個々の支援からクラスづくりへ

４歳児、5歳児、それぞれのクラスの実態に応じて支援をしてきている。アドバイザリースタッフから、4歳児には目標は一つずつ、言葉は具体的に等、5歳児には個々の興味関心を取り上げて広めていく、成功体験や感動体験を増やす等の助言をいただいた。今後、個々の支援を続けながら、ともに力を合わせるクラスづくりに努めるとともに、校種間の連携についての研究を進めていく。

## ２．指導助言

（指導助言のポイント）

◆「集団づくり」は、子どもたちにとって基礎的環境の整備であり、支援教育にも重要である。今後も保護者や地域と連携しながら支援教育を推進していくことが大切である。

◆子どもが出してくる「困っているサイン」を見逃さないようにすることが大事。例えば、落ち着かないのは「動きたい」サイン。叱っておさえるのではなく、積極的にお手伝いをさせるなどして発散させるとよい。

◆子どもへの支援を理論的に検証していく。また、効果的な支援を小学校へ引き継ぎ、一貫した支援を行うことが大切である。

＜指導助言者＞
梅花女子大学　伊丹　昌一　先生

# 通常の学級における発達障がい等支援事業
# 第2回地区別事業報告会（泉南地区）

平成26年1月28日15:45～17:00 （貝塚市教育研究センター）
当日参加者100人（幼稚園・こども園20　小学校65　中学校13　その他2 ）

## 1．実践報告

### ＜貝塚市立南小学校＞　学ぶためのレディネスを高める

学校あげて視覚認知を高める「ビジョントレーニング」に取り組むにあたり、アドバイザリースタッフに取り組みの意義を話していただき、全教職員が共通理解した上で取り組んだ。多くの児童の視機能の状況が改善し、字が丁寧になったり、用具の使い方が上手になる等の効果があった。今後も学ぶためのレディネスを高める方法の1つとしてワーキングメモリを鍛える取り組みも進めていきたい。

### ＜貝塚市立南幼稚園＞　個に寄り添った支援

幼小連携での取り組みとして「ワーキングメモリ」を鍛える「わくわくタイム」を取り入れた。普段の園生活での様々な経験の積み重ねと相まって、日々の生活において落ち着いた行動ができるようになってきた。

個に寄り添った支援と仲間づくりを通した支援の観点から、課題のある児童にどのようにかかわるかについてアドバイザリースタッフから助言を受け、担任と加配教員が役割を分担したかかわり方をすることで、児童の意欲的に頑張る気持ちが育ってきた。

### ＜貝塚市立永寿小学校＞　授業づくりと集団づくり

すべての子どもが「わかる」「できる」授業づくりをめざして、独自に作成したアンケート「おしえてね！わたしのこと・ぼくのこと」を実施することにより、子どもの困り感や得意・苦手さをより正確に把握し、日々の支援に活かした。また、サポートチームを招いての教師の学習会を行い、各教科等の特性を踏まえた指導をしていくことの大切さを確認した。

集団づくりについては、アドバイザリースタッフの学校訪問の際に、困っている原因がわかりづらい児童の事例検討を行い、児童や保護者へのかかわり方の助言をいただいた。

## 2．指導助言

（指導助言のポイント）

◆ 取り組みの結果、子どもがどのように変化したのか、あるいは、教師側にどのような実感があったかが重要である。

◆ 取組を通して、「できた」「楽しかった」という子どもの実感を活用していくことが大切である。そのためには、幼稚園教育要領でも示されているように、遊びを通して心を動かす体験をし、感じたことを表現することで、創造性を豊かにしていくことが大切になる。

◆「おしえてね！わたしのこと・ぼくのこと」は子ども個々の状況を把握するために有効である。実態の把握は教師の気づきにつながり、そこから支援は始まる。

＜指導助言者＞
大阪府教育委員会サポートチーム
閑喜　美史　主任指導主事

# 通常の学級における発達障がい等支援事業
# 第3回地区別事業報告会（泉南地区）

平成27年1月26日15:45～17:00（貝塚市立南幼稚園）、1月29日15:15～17:00（貝塚市立南小学校）、
2月2日15:15～17:00 （貝塚市立永寿小学校）
当日参加者306人（南幼稚園58　南小学校131　永寿小学校117　）

## １．実践報告

### ＜貝塚市立南幼稚園＞　学びの芽生えを育む

子どもたちが楽しいと感じる遊びの環境を構成し、一人ひとりの特性に応じ、発達の課題に即した指導を行いながら、合わせてワーキングメモリを鍛える活動と運動遊びを課題活動の中で取り入れ研究を進めてきた。
5月と11月のアセスメントシートを比較してみると、子どもの成長と指導の成果が表れるものとなった。

### ＜貝塚市立南小学校＞　すべての子どもが集中する授業の工夫

ビジョントレーニングやワーキングメモリを鍛える取り組み等、「学ぶ力の育成」を継続しつつ、今年度は、「授業の工夫」を重点課題として取り組んできた。すべての子どもたちが集中できる、参加が保障される授業づくりについて研究を進めてきた。アセスメントシートからクラス全体の強みと課題をつかみ、手立てを考えた。「南校授業セルフチェックシート」を作成し、お互いの授業を見る時や授業づくりの参考に使用した。

### ＜貝塚市立永寿小学校＞　授業づくりと集団づくり

独自に作成したアンケート「おしえてね！わたしのこと・ぼくのこと」の分析結果をもとに、各学級の実態に沿って指導計画を立て、「すべての子どもが『わかる』『できる』授業づくり」を研究してきた。同時に、あらゆる活動を通して自尊感情を高めながら、お互いを大切にしあえる集団づくりをめざしてきた。

## ２．指導助言

（指導助言のポイント）

◆　体系的プログラムとしてワーキングメモリを鍛える取り組みが取り入れられている。継続することが大切なので、幼稚園と小学校で連携を。

◆根拠に基づいた支援がなされている。今後、学び方のユニバーサルデザインに変えていくには、子どもの反応を見て指導の方法を変えていくことをが大切。

◆「愛着」に課題のある子どもを支援するにはエネルギーがいる。 教師は完全主義を脱却し、時には「まっ、いいか」と思うことも必要。 気持ちにゆとりを持ちながら、一貫した指導をブレずにすることが大事。

＜指導助言者＞
梅花女子大学　伊丹　昌一　先生